

## 第7章 海外の「インターネット依存」研究と文献資料

### 1. 「インターネット依存」研究の始まり

「インターネット中毒」や「インターネット依存」は、ジャーナリズムでは早くから問題視されてたものの、学術的な研究はつい最近着手されたばかりである。もっとも早くこの領域の研究に着手したひとりが、Kimberly S. Young である。Young (1998b) は 1994 年 11 月、いろいろな手段でボランティアを集め(新聞広告, キャンパスで配布したチラシ, 「インターネット依存」のためのオンライン・サポートグループ, Yahoo などのサーチエンジンで internet addiction をキーワード検索した人), 彼らに対して独自に開発した「インターネット依存」尺度を実施した。彼女の尺度は, DSM-IV (精神障害の診断と統計マニュアル第 4 版) で規定されている病的賭博の基準と同様な基準をもとにして「インターネット依存」であるかどうかを判断するもので, その結果, 496 人の被験者のうち, 396 人が「インターネット依存」とみなされ, 残りの 100 人が非依存とみなされた。非依存者のインターネット接続時間が 4.9 時間に過ぎないのに対し, 依存者のそれは 38.5 時間にも及んでいた。そしてインターネット利用が, 学業的, 社会的, 経済的, 職業的な人生に深刻な影響を与えていることが見出されたのである。

また, Brenner (1997) は, 薬物依存の診断基準を翻案して作成した 32 項目からなる Internet-Related Addictive Behavior Inventory (IRABI) を開発し, これをウェブページに掲載し, この調査に応じた 563 名の反応を分析した。回答者のほとんどがインターネット使用によって生活のほかの側面が悪影響を受けた例を報告しており, とりわけ時間管理の問題がもっとも一般的な問題であった。そして「インターネット依存」は, 薬物依存のように, 耐性(回答者の 55%; インターネットであまりに多くの時間を費やしてしまう), 禁断(同 28%; ログインしていないちょっとした間でも, ネットについて考えるのを止めることが難しい), 渴望(同 22%; インターネットに接続する時間を少なくすることができない)を含むものであった。

Greenfield (2000) は, Young (1998b) と同様に病的賭博の基準をもとにして「インターネット依存」を判断する Virtual Addiction Survey (VAS) を開発し, 1998 年に ABC ニュースのウェブ・サイト abc.com にログインし, この調査に反応を返してきた 8 歳~85 歳にわたる 17,500 人を対象とする大規模な研究を行った。Greenfield は, サンプルのうち 6% の人が「インターネット依存」の基準を満たしていることを見出した。これらの人は, と

りわけチャット・ルーム，ポルノグラフィー，オンライン・ショッピング，電子メールの虜になっていた。過剰なインターネット使用に貢献していたのは，インターネットの持つ脱制止，匿名性，アクセスのしやすさ，親密さの増進，時間感覚のゆがみ，オンラインのコンテンツの刺激性などの特質であった。

上記の諸研究はすべてオンライン研究であったが，オンライン調査には特有の限界がある。つまり，どうしても志願者対象の調査になるので，ヘビーユーザを多数集めるには適しているが，一般のインターネットユーザを代表的したサンプルとは言いがたくなる。つまりサンプリングのゆがみを避けることができないのである。そのため伝統的な質問紙調査も，主として大学生を対象に多く行われてきた。

Anderson (n.d.) は，8つの大学の1302人の大学生を対象に調査を行った。薬物依存の定義から翻案した7項目の質問で「インターネット依存」を定義したところ，1078人中106人(9.8%)が「インターネット依存」と認められた。非依存者は1日平均73分(週になおすと8.5時間)しかインターネットを使用していなかったのに対し，依存者は1日229分(週になおすと26.7時間)もインターネットを使用していた。依存者の多くは男性であり，自然科学専攻であった。「インターネット依存」者では，インターネット使用が学業や，新しい人とであう能力，睡眠パターンにより強い影響を与える傾向にあった。

このAndersonの研究以外にも，大学生等を対象とした研究は多く行われている。これらの研究結果の一覧は表1に示した。研究によって調査時期やサンプルが異なり，さらに「インターネット依存」を判断する尺度や基準も様々なので一致した結果とは言いがたいが，一般的に依存者とみなされる人は週に20時間程度使っていること，依存者の割合はおおむね5~10%程度であることがわかる。

## 2. 誰が「インターネット依存」になりやすいのか

「インターネット依存」に陥る人がどのような人かということに関しては，ステレオタイプ的なイメージがある。一般には依存者は「ほとんどあるいは全く社会的生活をおくっておらず自信も持っていない，社会的に未熟なティーンエイジャーの男の子」(Griffiths, 1998, p.63) だととらえられていたり，「多くは男性であり，技術的にはすぐれており，オンライン・ゲームやチャットなどのリアルタイムでインタラクティブな活動を行い，オンライン上では快適であり，有能であると感じる」(Morahan-Martin & Schumacher, 2000, p.14) 人ととらえられてきた。

このステレオタイプは、研究によって部分的には支持されている。「インターネット依存」者は、女性よりも男性に多いことは繰り返し確認されており（Anderson, n.d.; Chou & Hsiao, 2000; Morahan-Martin & Schumacher, 2000; Lin & Tsai, 2002）、技術的には優れており（Morahan-Martin & Schumacher, 2000）、自然科学専攻の学生に多く（Anderson, n.d.）、チャットやオンライン・ゲームを好む（Young, 1998b; Kubey, Lavin, & Barrows, 2001）。

事例的にも、このケースによくあてはまる例が、Griffiths（1998）によって報告されている。それは、イギリスに住む16歳の男子ジャミー（仮名）の事例である。一人っ子で母親と暮らしている彼は、週に70時間コンピュータを使い、そのうち40時間インターネットに接続していた。週末には午後2時から4時ごろにログインし、朝の1時から5時ごろまで接続しているのが通例であった。SFマニアを自称するジャミーは、テレビのスタートレックを議論するユーズネットのディスカッション・グループにいりびたっていた。彼は、インターネットは彼の人生の中でもっとも重要なものだと主張し、インターネットを使っていないときでさえインターネットのことを考えていた。インターネットアクセスができないと、禁断症状が現れ震えがくるのだった。彼は自分自身を依存者と見てはいなかったが、オンラインの時間を制限したりコントロールしたりすることは難しかった。「ぼくは、文字通り物理的に誰かに線を引っっこ抜かれるまでログオンしているだ。それがなきゃぼくは働くことも生きていくこともできないんだ。ぼくの社会的・知的な生活はそれに直接結びついているんだ」とジャミーは言う。彼は、電話料金の安い夜間にインターネットを使うため、不規則な睡眠パターンになっていた。ときおり寝過ぎて学校の授業をさぼることもあった。彼はインターネットを止めようとして3日間接続しなかったことがあったが、インターネットを止めようとする試みは成功しなかった。

しかし、このステレオタイプに全くあてはまらない例も多く報告されている。たとえば、テクノロジーには全く詳しくない中年の女性でも「インターネット依存」になることが、Young（1996）によって示されている。この事例は、「インターネット依存」になった43歳の主婦の事例である。最初彼女は、週に数時間程度チャット・ルームを覗くぐらいであったが、次第にその時間が長くなり、3ヵ月後には週に50-60時間に及ぶようになった。このころには、朝ログインし、一日中メールをチェックし、夜遅く、ときには夜明けまでインターネットに接続していた。コンピュータの前にはいないときには、鬱々とした気分で、不安を感じ、いらいらするようになった。この禁断症状を抑えるために、できる限り長い時間オンラインに接続したのである。そのため、実生活の友だちと電話することもなくなったし、家族との交流や、社交的な活動もしなくなった。その上、料理や洗濯、買い物な

どの日常の家事もしなくなった。娘たちは母親に無視されたように感じていたし、17年つれそった夫も多額の通信費用や妻が結婚生活に興味を失ったことに不満をもらした。しかし本人はインターネット使用が問題だとは考えてはおらず、夫の再三の勧めにもかかわらずカウンセリングを受けようとしなかった。彼女は、家族のほうこそ理不尽だと感じ、結局彼女は、娘たちとは別居し夫とも別れることになったのである。

これらの事例で分かるとおり、場合によってはステレオタイプの「インターネット依存」像があてはまる場合もあれば、全くあてはまらない事例もある。確かに大学生などを対象にした調査では、理系の男性に比較的多いという結果がほぼ一貫して得られているが、誰を対象にデータを収集するかでかなり結果が異なってくるのではないかと。また、インターネット自体が急速に普及し、その利用形態も変化していることから、今後「インターネット依存」の形態そのものが変わってくることも考えられる。現在のところ誰が「インターネット依存」になりやすいのかという面での結論を出すには時期尚早といえよう。

### 3. 依存者はインターネットで何をするのか

インターネットが依存を引き起こしやすい性質があるとはいえ、依存を引き起こしやすいインターネット・アプリケーションと、そうではないアプリケーションがあることは十分に予想される。表1にも示されているように、チャット、BBS、オンライン・ゲームなどは、依存者が非依存者よりも多く使っているアプリケーションとして挙げられることが多い。一般にユーザ間のリアルタイムの相互作用を含むようなアプリケーションは依存性が高く、ユーザが単に情報を集めるようなアプリケーションは依存性が低い(Young, 1997)と考えられている。しかし、報告によれば依存者がWWWや電子メールをより頻繁に使うという報告もあり(Chou & Hsiao, 2000; Wang, 2001)、必ずしもWWWや電子メールが安全だとは言えない。

また、インターネットでどんな目的で使うときに、依存になりやすいのかという観点からの検討も行われている。Young, Pistner, O'Mara, & Buchanan (1999)は、セラピストへのインタビューから、「インターネット依存」を、以下の5つのサブタイプに分けている。

- ・サイバーセックス: サイバーセックスやサイバーポルノのためにアダルト・ウェブサイトを強迫的に使う。
- ・オンラインの友人関係: オンラインの人間関係にのめりこみすぎる。

・ネット強迫:とりつかれたようにオンライン・ギャンブル, オンライン・ショッピング, オンライン取引にのめりこむ。

・情報過多:強迫的なネットサーフィンやデータベース検索。

・コンピュータ依存:強迫的なコンピュータゲーム使用(Doom, Myst, Solitaire など)

Davis (2002) は, オンライン・セックス, オンライン・オークション, オンライン株取引, オンライン・ギャンブルのように, 特定の目的のために病理的なインターネット使用をするようなケースを特定の PIU (Pathological Internet Use) と呼び, チャットやメールなどで社会的な接触をすることが原因でインターネットを使いすぎてしまうというような, より一般的な形態のインターネットの使いすぎを一般的 PIU と呼んで区別した。特定の PIU は, インターネットの特定の内容に依存するのであって, 仮にインターネットがなくても依存したであろうと考えられる。一方, 一般的 PIU はインターネット独自の特質, とりわけインターネットの社会的な機能が依存が起きるかどうかに大きく関与していると考えられる。

#### 4. 「インターネット依存」にどう対処するのか

「インターネット依存」の研究は, そもそもインターネットにのめりこむクライアントが臨床家のところに相談にやってきたことが研究が始まるきっかけだった (Young, 1998a/1998; DeAngelis, 2000)。そのため, 「インターネット依存」があるかないかが議論されるとともに, 実際にインターネットを過度に使う人に対してどのように対処するのが常に意識されてきたといってもいいだろう。しかし, 「インターネット依存」という概念が新しいものだけに, 「インターネット依存」に対する対処もまだ確立されているとはいえない。

現在のところその処遇アプローチは, 他の強迫的行動, たとえば病的なギャンブルとか, 強迫的な過食に用いられている処遇アプローチと似た手法がとられている (Potera, 1998)。嗜癖に対する対処は, アルコール, 薬物, ギャンブルへの依存などのように問題になっている行動を全面的に止めさせる場合と, 強迫的な過食や強迫的なショッピングのように過度の行動を正常なレベルに戻す場合がある。インターネットそのものは現代の生活にとって有用であり, 場合によっては必要不可欠なものであるので, 後者の強迫的な過食や強迫的なショッピングと同じカテゴリーになると考えられる (Jones & Minatrea, 2001)。つまり, どうやって限度を設定し, バランスのある活動をし, 時間のスケジュールをたてるの

かをクライアントに教えることが有効である (Potera, 1998)。場合によっては、過食を誘発する食べ物 (ケーキ, バター, ポテトチップス) を断たせるのと同じように、インターネットの特定のアプリケーション (チャット・ルームを訪れること) を断つようにする方法もとられる。

Young, Pistner, O'Mara, & Buchanan (1999) は、オンラインのディスカッション・グループに投稿していたり、彼女たちのホームページ (The Center for On-Line Addiction) を訪れたセラピスト 35 名 (平均した臨床経験は平均 14 年) を対象にして調査した。その結果、彼らは以下のような処遇方略を用いていた。(1) サイバーセックス依存の患者には、現実の性犯罪へ移行しないために性犯罪サイコセラピーが行われる。(2) 過度に恥ずかしがり屋だったり自意識過剰だったりして、オンラインの人間関係に過度に依存しているクライアントに対しては、社会的スキルを高めるために、認知 - 行動療法や対人関係セラピーが行われる。(3) 結婚生活や家族の生活の安定性を脅かし、別居や離婚につながりかねないオンラインの浮気に対しては、婚姻セラピーや家族セラピーが用いられる。(4) 現実の情緒的困難さ、問題状況、個人的な苦境などから逃れるためにオンラインで別のペルソナを演じ、そのことが強迫的なインターネット使用につながっているような場合には、心理療法や薬物療法が適切である。また、「インターネット依存」に特化したサポートグループを考えているセラピストも少なからずいた。

このサポートグループは、アルコール依存、薬物依存、過食症などの依存症を処遇するためによく用いられている (アルコール・アノニマス、麻薬アノニマス、過食アノニマスなど)。欧米ではそのなかでもキリスト的な価値観に基づく 12 ステップ技法を用いるサポートグループが大きな成功をおさめている。「インターネット依存」についても、アメリカでは多くのサポートグループが設立され (Jones & Minatrea, 2001), 12 ステップ技法 (Watters, 2001) も用いられている。サポートグループはオンライン上 (Young の Center for On-line Addiction; <http://www.netaddiction.com/> など) にも存在しているが、このオンライン上のサポートグループに関しては、賛否両論がある。つまり、サポートによって治療的な効果が期待される一方、サポートを受けるためにオンラインにアクセスするので、このことによって過度のインターネット使用が固定化してしまうかもしれないという心配があるのである。

「インターネット依存」に対する具体的な治療としては、認知 - 行動療法的なアプローチが多く用いられるようである。その具体例として、Young が述べている「インターネット依存」者に対する処遇方略 (Young, 1999) を以下に列挙してみよう。

- ・反対の習慣をつける:インターネットをいつ、どこで、どの程度利用しているのかを把握し、ふだん習慣となっている利用パターンとは反対の行動を行うようにさせる。たとえば、クライアントが朝一番にメールをチェックするのなら、インターネットにログオンする代わりにシャワーを浴びることを勧める、ウィークデーの夜にインターネットを使っているのなら週末まで待たせ、書斎でインターネットを使っているのならベッドルームで使うようにアドバイスするなど。
- ・外部的なストッパー:クライアントがしなければならなかったり、行かなければならなかったりする具体的なことを使って、インターネットからのログオフをうながす。たとえば、クライアントが朝の7時30分に仕事に出かけるのなら、6時30分からログインするようにさせるなど。この場合、仕事に出かけることが、インターネット利用を打ち切らせるきっかけの役目を果たす。
- ・目標を設定する:無理のない目標設定をして、計画的な利用をさせる。たとえば、現在40時間使っているのなら20時間の目標設定をさせる。そして、ウィークデーは午後8時から10時まで、土日は午後1時から6時まで利用するなどの、具体的な利用時間をカレンダーなどに書き入れておくなど。
- ・禁欲:特定のアプリケーションが「インターネット依存」のきっかけとなっており、その適切な利用が難しい場合には、そのアプリケーションの使用を全面的に止めさせる。しかし、それ以外のアプリケーションの使用は認める。たとえば、チャット・ルームの使用に依存しているのなら、チャット・ルームの使用を止めさせるが、電子メールやWWWの利用は認めるなど。
- ・リマインダー(思い出させ)カード:「インターネット依存」によって引き起こされる5つの問題点と、インターネット使用を少なくしたり特定のアプリケーションを使わないことの5つの利点をリストアップさせ、3×5インチのインデックスカードに書き込ませる。これを、ズボン、コートのポケット、財布などに入れ、インターネットの誘惑にかられそうになったときには取り出して、自分のために何を避け、何をしようと思っていたのかを思い出すように教える。
- ・自分自身の調査:クライアントにオンラインにいる習慣が始まってから、あまりしなくなったことをリストアップさせ、それに1:とても重要、2:重要、3:あまり重要でないというランクをつけさせる。そしてクライアントにこれらの活動、とりわけ「とても重要」と評定された活動がいかに自分の生活の質を高めていたのかを思い出させる。これはクライアントが現実生活で得られる楽しい感情を思い出して、オンラインで情緒を満足させる必要性を減ら

す効果がある。

- ・サポートグループ: 孤独なライフスタイルを送っている人がチャットを社会的サポートの代用とすると、愛する人の死や、離婚、失業などの問題に直面した人が、実生活の問題から逃れる手段としてインターネットにのめりこむ場合がある。このような場合、クライアントが適切なサポートグループを見つけ、そこで同じような境遇の友だちを作るなど現実社会での関係が持てるようになると、インターネットに依存することが少なくなる。
- ・家族療法: 婚姻関係や家族関係がインターネットのために壊されたり、悪い影響を受けていたりする場合には、家族療法が必要となる。家族への介入は、(a)インターネットがいかに依存的になりやすいのかについて教え、(b)家族が依存者の行動を非難することを軽減し、(c)依存が起きる前の家族の問題についてオープンに語れるようにし、(d)依存者の回復への家族からの援助を奨励するなどの点に力を入れる。

## 5 . 子どもは「インターネット依存」になりうるのか

これまで述べてきた「インターネット依存」の研究報告では、大学生以上の年齢層を対象とすることが多い反面、高校生以下の子どもたちの研究例は少ない。しかし、これは高校生以下の子どもたちが「インターネット依存」にならないことを示しているわけではない。それどころか、子どもが「インターネット依存」になる可能性は十分ある (Greenfield, 1999)。

先に紹介した 16 歳のジャミーの例 (Griffith, 1998) も高校生にあたる年齢の子どもであったが、そのほかにも、Young (1998a/1998) は「インターネット依存」になった 13 歳のピーターの事例を紹介している。彼は、チャット・ルームにであったのをきっかけにインターネットにのめりこむようになった。親は 1000 ドルを超える通信料金に驚き、また成績の低下を心配してコンピュータ使用の制限をするようになった。ピーターはこの親の処置に対して反抗的態度をとるようになり、親はコンピュータをとりあげてしまう。ピーターはますます反抗するようになったので、親は一転してコンピュータ使用を認めるが、今度は一晩中アクセスするようになり、ついにカウンセリングを受けることになった。カウンセラーは、自分に自信が持てないことが原因だと指摘し、コンピュータ使用については現実的な目標を持たせて利用時間を減らすようアドバイスした。ピーターは、父親と過ごす時間が増え、問題は解決に向かったのである (Young, 1998a/1998)。

Tsai & Lin (2000) は、ロジャーという台湾に住む 17 歳の高校生の事例を報告している。



ロジャーは、毎日3~4時間、週末や休暇中にはそれ以上の時間(6時間以上)をオンラインで過ごしていた。彼のインターネットを使う目的は主に人とコミュニケーションするため、現実の友だちよりも、インターネットの友だちの方を多く持っていた。ロジャーの親は中学校程度の教育を受けていたが、自分の息子がインターネットに魅入られていることを理解できなかった。家業のオーナーである彼らは、しばしば家を空けることがありそのためロジャーがオンラインにいることに注意を払っていなかった。ロジャーは世界記録を作るために、11日間眠りもせずぶっつけでオンラインにいたと言っている。彼の先生は、彼の家を訪問して、インターネット用の機器を引き抜き隠してしまうことさえあった。このようにインターネットにあまりにのめりこんだために、ロジャーの学校の成績はすっかり落ち込んでしまったという事例である(Tsai & Lin, 2000)。

以上のように、高校生ないしそれ以下の年齢の子どもたちが「インターネット依存」になった事例はかなり報告されているが、まとまった調査研究はあまりない。その中で、Lin & Tsai (2002)は台湾の高校生を対象に「インターネット依存」の調査を行っている。この調査の結果、753名の台湾の高校生のうち88名が「インターネット依存」者として分類された。非依存者が週に9時間しかインターネットを使わないのに対し、依存者は約倍の週18時間をインターネットに費やしていた。依存者は、日々のルーチン、学校の成績、親との関係などにおいて、非依存者より有意に高いネガティブな認識を示していた。

また子どもの場合、かりに依存というほどにはいなくても、インターネットの使いすぎが子どもに悪影響を与える可能性を考慮する必要がある。インターネットの使いすぎや濫用は、子どもたちがその年齢にふさわしい活動や、友だち、スポーツ、宿題、家族との時間などを経験することを損ね、子どもの社会的、教育的、心理学的発達を阻害するかもしれないのである(Greenfield, 1999)。

## 6. 子どもたちを「インターネット依存」にしないために

子どもを「インターネット依存」から守るために、Youngは子どもの言動を注意深く見て、次のようなサインがあるかどうかを確かめることを勧めている(Young, 1998a/1998, 邦訳 pp.216-218)。そして、これらのサインのうち3つ以上にあてはまるなら「インターネット依存」になっている可能性があるとしている。

- ・疲れたようすを見せる
- ・学校の成績が下がる

- ・趣味への関心が薄れる
- ・友達と出かけなくなる
- ・言うことを聞かなくなり、反抗的な態度を取る

Greenfield (1999) はその著書の中で、子どもが「インターネット依存」になる兆候として、Young よりもやや詳しいリストを掲げている (Greenfield, 1999, p.189)。

- ・オンラインに過度の時間を費やしていたり、次第に費やす時間が増えてきている
- ・生活の中でしなければならないことを無視するようになる
- ・成績が下がったり、仕事が振るわなくなったりする
- ・たびたび学校を欠席したり、勤務先で欠勤したりするようになる
- ・オンラインの新しい関係を優先して、実生活の友だちを無視するようになる
- ・オンラインで何をやっているのかについて語ろうとしなくなる
- ・怒りっぽくなったり、社会的に孤立するようになってきた
- ・ムードの変化が起きた。とりわけ鬱的になってきた
- ・以前していた伝統的な活動に興味を失ってきた
- ・オンラインでであった人たちと、実際にであったり電話をしたりするようになる

しかし、以上のような「インターネット依存」の兆候が現れていたとしても、依存の原因がインターネットとは限らないことに注意が必要である。たとえば、ほかの心理学的な問題のために「インターネット依存」になっていたり、インターネットが安全基地になっていたりする場合も考えられる。また、その子が「注意欠陥多動性障害」である可能性も考慮する必要があるし、原因が子どもの問題ではなく家族全体の問題であるかもしれない (Young, 1998a/1998, 邦訳 p.218-219)。

もし子どもが「インターネット依存」を疑われる場合には、子どもとよく話し合い、子どもの話にしっかりと耳を傾けることが必要である。その上で Young は次のような対策をとることを勧めている (Young, 1998a/1998, 邦訳 pp.220-225)。

- ・夫婦で統一戦線を張る
- ・子供のことを気にかけていることを示す
- ・インターネットのタイムログを取らせる
- ・妥当なルールを決める
- ・コンピュータを目に見えるところに置く
- ・ほかのことに興味を向けるようにうながす
- ・子供を支え、中毒を助長しない

・必要ならば外部の助けを求める

## 7. 韓国での「インターネット依存」の現状

これまで述べてきた諸研究は、主として欧米、とりわけアメリカのインターネットユーザを対象とした研究が多かったが、「インターネット依存」が問題になっているのは欧米だけではない。日本の隣国の韓国では、PC 房（バン）と呼ばれる 24 時間営業のインターネット・カフェが全国に 25,000 個所以上もあり、また家庭には ADSL などの高速インターネットが急速に普及している。インターネット利用者の比率は、国民のほぼ半数にも及ぶなど、日本とは比較にならないくらいインターネットが普及している。その中で、若者や主婦の「インターネット依存」が大きな社会問題となってきた。

インターネット・アプリケーションの中でもとりわけ深刻な影響が心配されているオンライン・ゲームは、韓国でも大きな問題として報道されている。もっとも極端な例のひとつは、2002 年 10 月に起きた 24 歳の Kim Kyung-jae の事件である。彼は光州のインターネット・カフェで 86 時間も事実上ノンストップでゲームをしつづけた後死亡してしまった。事件を捜査した刑事によると「彼がほんのちょっと休憩をとったのは、タバコを買いに行く間とトイレに行く時だけだった」(Gluck, 2002)。韓国でもっとも人気のあり、しかも依存を引き起こしやすいオンライン・ゲームは NCsoft 社の Lineage だと言われる。4600 万人の人口のうち 200 万人が Lineage のアカウントを持ち、夕方になればほぼ 10 万人の韓国人が同時にゲームに参加する。このゲームをめぐる暴力沙汰などの事件も頻発しており、オフライン PK (player killings) とも呼ばれる(Levander, 2001)。17 歳の Ki Kyoung-soo もゲームに魅了されている。「ぼくが 5 時に家に帰るとすると 朝の 2 時までゲームをする。休みの日には朝の 5 時まで 12 時間ぶっとうして遊ぶんだ。ベッドにいる時にも目がさめて、またゲームがしたくなる」(Gluck, 2002)。

家庭の主婦もインターネットに依存する可能性があることは Young (1996) が早くから指摘していたが、韓国でも同じような問題が起きている。「韓国男性の電話相談記録 (99 年 7 月～2001 年 6 月) によると、家庭不和に関する相談 1167 件中、16.3% の 190 件が“妻がインターネットでチャットをする”から始まる内容のものであることが分かった。特に、インターネットのチャットに熱中する主婦の 44.2% が不倫の関係に陥り、また、家出までしたケースも 10% に及んだ。」(朝鮮日報, 2001)

子どもへの影響に関しては、オンライン・ゲームに依存すること以外にも、インターネ

ットの性的な刺激にさらされることの危険性が問題視されている。韓国教育學術情報員 (KERIS) のチョ・ジョンウ博士が、中3と高1の生徒2509人を対象に調査した結果、「インターネットを使用して偶然にアダルトサイトなどにアクセスしたことがあるか」という質問については44.7%が“たびたびある”, 14.7%が“よくある”と答え、全体の59.3%がインターネットのアダルトコンテンツにさらされていたことが分かった。」(朝鮮日報, 2003b)。

WWWや電子メール、チャットなどにのめりこみ、学業に悪影響がでる学生がいることに関しても欧米の研究報告と変わりがない。梨花女子大のWohn, Dong-hee (n.d.)によると、同大学のHong Yoo-jungは、授業に出ているとき、寝ている時、移動している時以外のすべての時間をインターネット上で、あちらこちらのサイトをネットサーフィンしながら過ごすという。彼女は15のメールアドレスを1日に何度かチェックし、34のコミュニティ・サイト(そのうちの6つは自分で作ったもの)のメンバーでもある。2年生のLee So-youngは「家に帰るとすぐチャットを始め、朝の5時から6時ごろまで続けている。睡眠不足のため、授業中はうたたねをしてしまう」と言う(Wohn, n.d.)。

このような若者たちの「インターネット依存」状況を把握するために、韓国では大規模な調査も行われている。「延世(ヨンセ)大学・心理学科の黄相旻(ファン・サンミン)教授は今年(引用者注:2001年11月のこと)13~19日、ネチズン1万3588人を対象に実施したアンケート調査の結果、国内の「インターネット中毒」者は最大738万人と推定されたとし、米国(6%)よりも5倍以上高い中毒率だと指摘した。」「中毒の症状は、インターネット使用時間が1日8時間以上、仕事以外の使用時間が5時間以上、日常生活に支障を与える程のインターネット使用などが挙げられている。年齢別には10代が51.6%, 20代が42%, 30代が28.9%, 40代が22.9%など、年齢が下がる程中毒者が多かった」(朝鮮日報, 2001)。この調査はオンライン調査であり、また「インターネット依存」の判断基準が、Youngの基準と使用時間が全体の上位10%とのいずれかを満たすものという独自の基準だったので、依存者比率が他の研究よりもやや高く出ているかもしれない。「インターネット依存」者比率に関しては、最近より正確な調査も行われた。「(韓国)情報通信部は「インターネット中毒」であるかどうかを診断できる“「インターネット中毒」自己診断プログラム”(K尺度)を通じ、国内の小・中・高校生2000人を調査した結果、小学生の約5%, 中・高生の4.2%が、中毒の症状が深刻な“高危険使用者”であることが分かった」「高危険使用者は、インターネットの使用により日常生活に深刻な障害を来すなどの中毒に陥ったケースで、(中略)中・高生は1日4時間以上、小学生は3時間以上インターネットを

使用し、学業に支障を来たしており、現実世界で激しい孤独感を感じたり、無計画的な衝動を感じたりすることもある」(朝鮮日報, 2003a)。

韓国では諸外国以上にインターネットが急速に進展したという特殊事情を有しているため、これまで述べてきた深刻な事態に急に直面することになったが、「インターネット依存」を専門にするセラピストはきわめて限られている。そのため、韓国・情報通信部(MIC)と情報文化振興院(KADO)は、「インターネット中毒」予防・カウンセリングセンター(CIPC)を創設した。ここでは、「インターネット依存」予防教育の提供、「インターネット依存」者に対するカウンセリングやオンライン・サポートを提供するとともに、セラピストの養成も行っている(「インターネット中毒」予防・カウンセリングセンターのホームページ, <http://www.internetaddiction.or.kr> を参照のこと)。

以上の韓国内の現状は、ほとんどが報道資料を参考にして述べてきたものである。韓国内では多くの「インターネット依存」に関して多くの学術的な報告も行われているようであるが、そのほとんどが韓国語で記され韓国内で発表されている。そのため、残念ながら今回は学術的な面で、韓国と諸外国との「インターネット依存」の異同を評価することはできなかった。しかし全般的に見て、欧米で研究されてきたインターネットの特徴などきわめて似通っており、基本的には同様の依存プロセスを経ているのではないかと思われる。もちろん24時間営業のインターネット・カフェが国内にきわめて多数存在すること、これまで支配的だった儒教的な価値観の解放をインターネットがもたらしたこと、そして何よりも政府の政策的な後押しもあって高速なインターネット回線が家庭に急速に普及したことなど、韓国独自の特殊事情もある。この韓国の現状は、同種の文化的背景を持つ日本が今後直面するであろう問題を先取りしているという点で大いに参考になると考えられる。

著者	調査方法	調査対象者	平均年齢	依存者比率	性差	インターネット 使用時間 *1	依存者に特徴的な アプリケーション	使用尺度
Young, K.S. (1998)	オンライン調査 電話調査	依存者: 396 名 非依存者: 100 名	男性 29 歳 女性 43 歳	-	-	依存: 週 38.5 時間 非依存: 週 4.9 時間	チャット, オンラインゲーム	病的ギャンブルの基準から翻案した 8 項目, Diagnostic Questionnaire (DQ)
Brenner, V. (1997)	オンライン調査	563 名	34 歳	-	なし	19 時間	-	薬物濫用の基準から翻案した 32 項目
Greenfield, D.N. (1999)	オンライン調査	17,500 名	33 歳	6%	-	-	-	DSM/IV の病的ギャンブルの基準から翻案した 10 項目
Anderson, K.J. (n.d.)	質問紙調査	大学生 1,302 名	-	9.8%	男性 > 女性	依存: 26.7 時間 非依存: 8.5 時間	-	薬物濫用の基準から翻案した 7 項目
Chou, C., & Hsiao, M.C. (2000)	質問紙調査	大学生 910 名	21 歳	5.9%	男性 > 女性	依存: 週 20-25 時間 非依存: 週 5-10 時間	BBS, WWW, 電子メール, オンラインゲーム	Chinese-IRABI(Internet-Related Addictive Behavior) version II と, Young(1998)の DQ
Morahan-Martin J., & Schumacher, P. (2000)	質問紙調査	大学生 283 名	21 歳	少し問題: 64.7% 依存: 8.1%	男性 > 女性	依存: 週 8.48 時間 少し問題: 週 3.18 時間 非依存: 週 2.47 時間	オンラインゲーム	Pathological use scale(13 項目)
Shapira, N.A. et al.(2000)	面接調査	依存者 20 名	18 歳以上	-	-	週 27.9 時間 (仕事以外)	チャット, 電子メール, WWW, オンラインゲーム	-
Kubey, R.W. et al. (2001)	質問紙調査	大学生 572 名	20 歳	9.3%	-	依存: 週 11.2 時間 非依存: 週 3.84 時間	チャット, オンラインゲーム	独自尺度, 1 項目
Wang W. (2001)	質問紙調査 電子メール調査	大学生 217 名	25 歳	light 27.9% severe 4.0%	男性 > 女性	依存: 週 22.4 時間 非依存: 週 10.5 時間	WWW, 電子メール, オンラインゲーム	Morahan-Martin and Schumacher's (1997) の IAD(Internet Addiction Disorder)尺度, 10 項目
Caplan, S.E. (2002)	質問紙調査	大学生 386 名	20 歳	-	-	-	-	Generalized Problematic Internet Use Scale (GPIUS)
Lin, S.S.J., & Tsai, C.C. (2002)	質問紙調査	高校生 753 名	-	11.7%	男性 > 女性	依存: 週 17.6 時間 非依存: 週 9.0 時間	WWW, チャット, BBS, ftp	Internet Addiction Scale for Taiwanese high schoolers (IAST)
Pratarelli, M.E. & Browne, B.L. (2002)	質問紙調査	大学生 524 名	20 歳	-	-	-	-	Pratarelli et al. (1997)で開発した尺度

\*1 「依存」は「インターネット依存」している者, 「非依存」は「インターネット依存」でない者。日あたりの分数が示してある場合には, 週あたりの時間数に換算して示した。

## 引用文献

- Anderson, K.J. (n.d.). Internet use among college students: An exploratory study. Retrieved January 4, 2002, from <http://www.rpi.edu/~anderk4/research.html>
- Brenner, V. (1997). Parameters of Internet use, abuse, and addiction: The first 90 days of the Internet usage survey. *Psychological Reports*, 80, 879-882.
- Caplan S.E. (2002). Problematic Internet use and psychosocial well-being: development of a theory-based cognitive-behavioral measurement instrument. *Computers in Human Behavior*, 18(5), 553-575.
- 朝鮮日報 (2001). 「インターネット中毒」で家庭崩壊. 朝鮮日報, 2001.11.29
- 朝鮮日報 (2003a). 「ネット中毒」小学生が最も深刻. 朝鮮日報, 2003.02.16
- 朝鮮日報 (2003b). 韓国の10代、25%が「ネット中毒」. 朝鮮日報, 2003.03.11
- Chou, C., & Hsiao, M.C. (2000). Internet addiction, usage, gratification, and pleasure experience: The Taiwan college students' case. *Computers and Education*, 35(1), 65-80.
- Davis R.A., Flett G.L., & Besser A. (2002). Validation of a new scale for measuring problematic internet use: Implications for pre-employment screening. *CyberPsychology and Behavior*, 5(4), 331-345.
- DeAngelis, T. (2000). Clinicians drawn in by clients with Internet abuse problems. *Monitor on Psychology*, 31(4), Retrieved December 26, 2002, from [http://www.apa.org/monitor/apr00/addiction\\_box2.html](http://www.apa.org/monitor/apr00/addiction_box2.html)
- Gluck, C. (2002). South Korea's gaming addicts. Retrieved March 23, 2003, from <http://news.bbc.co.uk/1/hi/world/asia-pacific/2499957.stm>
- Greenfield, D.N. (1999). *Virtual addiction: Help for netheads, cyberfreaks, and those who love them*. Oakland, CA: New Harbinger Publications.
- Greenfield, D.N. (2000). Psychological characteristics of compulsive Internet use: A preliminary analysis. *CyberPsychology and Behavior*, 5(2), 403-412.
- Griffiths, M. (2000). Does internet and computer "addiction" exist? Some case study evidence. *CyberPsychology and Behavior*, 3(2), 211-218.
- Jones, K.D., & Minatrea, N.B. (2001) The Consequences of Internet Addiction: Implications for Counseling Practice. *Journal of Technology in Counseling*, 2(1). Retrieved November 25, 2002, from [http://jtc.colstate.edu/vol2\\_1/Addiction.htm](http://jtc.colstate.edu/vol2_1/Addiction.htm)
- Kubey, R.W., Lavin, M.J., & Barrows, J.R. (2001). Internet use and collegiate academic performance decrements: Early findings. *Journal of Communication*, 51(2), 366-382.
- Levander, M. (2001). Where Does Fantasy End? *Time Magazine*, June 4, 157(22). Retrieved March 23, 2003, from [http://www.time.com/time/interactive/entertainment/gangs\\_np.html](http://www.time.com/time/interactive/entertainment/gangs_np.html)
- Lin, S.S.J., & Tsai, C.C. (2002). Sensation seeking and internet dependence of Taiwanese high school adolescents. *Computers in Human Behavior*, 18, 411-426.
- Morahan-Martin J., & Schumacher, P. (2000). Incidence and correlates of pathological Internet use among college students. *Computers in Human Behavior*, 16(1), 13-29.

- Potera, C. (1998). Trapped in the web. *Psychology Today*, 31(2), 66-69.
- Pratarelli, M.E. & Browne, B.L. (2002). Confirmatory factor analysis of internet use and addiction. *CyberPsychology and Behavior*, 5(1), 53-64.
- Shapira N.A., Goldsmith T.D., Keck P.E., Khosla U.M., & McElroy S.L. (2000). Psychiatric features of individuals with problematic internet use. *Journal of Affective Disorders*, 57(1), 267-272.
- Tsai, C. C., & Lin, S. S. J. (2000). Internet addiction of Taiwanese adolescents: an in-depth interview study. Paper presented at the 107th annual convention of the American Psychological Association, Washington, DC.
- Wang W. (2001). Internet dependency and psychosocial maturity among college students. *International Journal of Human-Computer Studies*, 55(6), 919-938.
- Watters, S.O. (2001). Real solutions for overcoming internet addictions. Ann Arbor, MI: Servant Publications.
- Wohn, Dong-hee (n.d.). Internet Addiction Takes Ewha from Cyber to Psyber. Retrieved March 23, 2003, from <http://evoice.ewha.ac.kr/web/archives/4702/fea1.htm>
- Young, K.S. (1996). Addictive use of the internet: A case study that breaks the stereotype. *Psychological Reports*, 79, 899-902.
- Young, K.S. (1997). What makes the internet addictive: Potential explanations for pathological internet use. Paper presented at the 105th annual conference of the American Psychological Association, August 15, 1997, Chicago, IL.
- Young, K.S. (1998a). Caught in the Net: How to recognize the signs of internet addiction and a winning strategy for recovery. New York, NY: John Wiley. 小田嶋由美子(訳) (1998). インターネット中毒 - まじめな警告です. 毎日新聞社.
- Young, K.S. (1998b). Internet addiction: The emergence of a new clinical disorder. *CyberPsychology and Behavior*, 1(3), 237-244.
- Young, K.S. (1999). Internet addiction: symptoms, evaluation and treatment. In L. VandeCreek & T. Jackson (Eds.). *Innovations in Clinical Practice: A Source Book* (Vol. 17; pp. 19-31). Sarasota, FL: Professional Resource Press.
- Young, K.S., Pistner, M., O'Mara, J., & Buchanan, J. (1999). Cyber-disorders: The mental health concern for the new millennium. Paper presented at 107th APA convention, August 20, 1999.